

陸上自衛隊員の孤立者救出活動

十勝の大地を暴れ狂った記録的な集中豪雨、鹿追の母なる川「然別川」のはんらん、ゴーゴーとうなりをあげる濁流は町内の大半を狂流した。

町民のだれもが経験した事のない未曾有の豪雨の中で、一人の犠牲者もでなかった事は、不幸中の幸いと言えよう。

その陰には、陸上自衛隊鹿追駐とん地（寺野一行司令）隊員の決死の救助活動と、土砂崩れで道路を断たれ、然別峡「ホテルかんの」に閉じ込められた宿泊客や従業員をヘリコプターで救出した陸上自衛隊第5飛行隊（讓葉佐敏隊長）の活躍があった。



濁流の中、ゴムボートで救出に向かう陸上自衛隊鹿追駐とん地隊員（十勝毎日新聞社撮影）

前ページ写真は、西瓜幕西30線27号の然別川右岸で決壊寸前個所の盛土作業をしていた作業員が、突然の河岸決壊により中州に取り残されたため、鹿追駐とん地隊員が救助に向かうときのものですが、これを現地取材した十勝毎日新聞社の杉山謙二地方部記者は「22—2121この一年」で次のように語っている。

——川はもともと右にカーブを描いている。これを曲がり切れず、一直線にあふれ出したものらしいが、初めに行った地点はその下流。とてもここからの救出は不可能だった。それよりも水が正面からまともに迫り、こちらの足もとが危うくなって、救助隊が後退を開始。これに続こうとしたが、目の前で水が先回りをして、砂利道を半分削り取った。「頼む」とハンドルにすがり、アクセルを踏んだが車は流れの中央で急に速度を失い、止まる寸前。「動け動け」と念仏のようになえ全身に冷や汗が。

救助隊は大きくう回して決壊個所の上側に回った。懲りずに後を追いつ、ゴムボートによる救出作戦の最先端でずぶぬれになり、夢中でシャッターを押した。「まったくどういう連中だ」。隊員たちは大木をなぎ倒す濁流の中に木の葉のようなボート一枚で、のまれるように突っ込んで行った。

雨にかすんだ向こうからボートが引き返して来るのが確認された。「やった」——

